傳統新手課

川崎洋

昭和三十三年六月五日　發行

©

著者　吉川英治

發行者　朝日新聞社
李家正文

印刷所　大日本印刷株式會社

發行所　朝日新聞社
東京有樂町・大阪中之島
小倉砂津・名古屋広小路

定価　320円

はしがき

どうも、序文といふよりは、これは〝おことわりがき〟になりさうです。

なにじろ、この中に收められた隨想や紀行文の一切は、後になつて、こんな單行本として纒められるつもりなどはちつともなく、唯、その時々の必要やら感興やら、また長年にわたる讀者のおたづね等に應へるために書いたりしたものが、あらましですから、いま一書として編錄されたのを見ますと、まことに布置や祖述の首尾も體を成してをりません。

いつてみれば「新・平家物語」を書きつゝあつた七年間の副產物にすぎないのです。ですから、完結直後にすぐ別卷として出すやうな企畫もあつたのですが、つい私として氣のりせず、のびのびにしてゐたのでした。ところがその後もしきりに、問ひあはせて來られる要望も絕えませんし、かたがた、二十四卷といふ著には、一册の補遺をかねた著者隨感の添加されるぐらゐなことは、あつた方がむしろ自然で、また主卷を讀まれた人々の興を扶けもしようなどと言はれて、ではと、つひに出版していたゞくことになつたのです。

收載中の「筆間茶話」は、週刊朝日のうへで、毎月一回づゝの梗概を〃——前回までの梗概に代へて〃として書いてゐたもので、これは從來の型どほりな小說のあらすぢといつたものでなく、著者と讀者とが茶の間に寄つたやうなつもりで、折々の質疑應答やら私の身邊雜事なども勝手にかきちらしたので、ずゐぶん長年の間讀者諸兄姉にも、この欄には親しみをおぼえてくれたやうでした。

それと、今となつてみて、一そうなつかしいものは、執筆中の寸暇をみては、よく諸々方々へ史蹟歩きに出かけたその折々の紀行です。

數篇の「新・平家紀行」はそれの所產でありますが、私は靑年時代からよく先人の紀行が好きでそれを愛誦したおぼえがあるので、自分も新・平家紀行では、さぐりえた史實の報告やあつかひなどよりも、もつぱら杉本畫伯や社の同行者たちをも加へた一種の紀行隨筆たることを多少意圖して書いてをりました。——それも終戰後の日もまだ淺いうちの地方見聞でしたから、今日から振返つてみると、かへつてその頃の世相圖を偶然書きおいたやうなことにもなつて、自分にはよい生涯の思ひ出ではありますし、讀者にもまたべつな興趣がそこに見出されるやもしれません。

伊豆紀行だけは、つひに完結のさいご迄、書けずじまひでをりました。そこで當時の旅行を共にされた嘉治隆一氏や春海鎭男氏などの集まつて下すつた一夕の會に、私や杉本健吉氏らも加はつて、みんなの思ひ出ばなしを速記にしたのです。この中に、志賀直哉氏の「志賀日記」を隨所に引用させて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

いたゞいたのは何とも恐縮にたへません。

このほかにも、紀行として書けば、武藏野周邊やら房總地方、近畿あたりなどの小旅行もしばしばあつたのですが、年たつに從つて、大部分忘れてゐます。なにしろ私はそんな折もメモとか寫眞とか、また日記をつける習慣さへないので、ほとんど忘れ去るにまかすといつた懶惰なんです。それがこんなに纏められたのは、まつたく「新・平家」起稿以來、それの完成に協力してゐてくだすつた蔭の社中諸兄の御丹精だつたと申すほかありません。

長谷川如是閑氏との「吉野村對談」も、これに收錄されましたが、あれはまだ新・平家をかきだした、ごく初期の頃ではあり、また多くの人々もまだ疎開先にあつた時代に偶々翁の來訪をえましたので、あんな數刻の閑談になつたものです。私一個の文章でもないので、これにいれるのはどうかと思ひましたが、翁もこゝろよく御承諾くだすつたので收めたといふ編者のはなしでした。厚くお禮を申しあげます。

惜しいのは、これに讀者寄稿による「平家村史料」を載せることが出來なかつたことです。その平家村史料は、週刊朝日誌上で募集をこゝろみた結果、全國の平家村分布地方から約二百七、八十通にのぼる口碑、傳說、圖繪、歌謠、風俗、變遷などの御報告があつたものなのですが、いかんせむ、こ

れの整理にはたいへんな日時とまた重複、錯誤などもたゞして、さらに筆を加へなければなりませんので、研究目的は果されたわけですが、まだこれを上梓するまでには整つてをりません。いつかこれもまとめる事ができたら好箇な後代文献にはなるだらうと思はれます。

終りに。

書中にも隨所にのべてありますが、新・平家物語の完成には、じつに表面に見えない各方面の方々の御盡力があり、いまさらのやうな感銘を新にしてをります。わけてこの「隨筆新平家」の一書も、御多忙のなかを嘉治隆一氏がたんねんに編纂その他の勞をとつて下すつたもので、私としては多少の校訂を見ただけで何も勞せず刊行をみたものでした。同時にまた、書幀そのほかに、あひかはらずな熱意をもつておすゝめ下すつた朝日出版局の諸兄にもあつくお禮を申しあげます。——と、かう書いて來て思ふのですが、どうも作家といふものは、作品を生むまでには、朝な夕なの胎愛や陣痛をもいとしむものですが、生んでしまつて、それが社會に送られてしまふと、鳥の親みたいに、もう素知らぬ振りになるものとみえます。それは他人の子よりは可愛いものにちがひないんですが、すぐまた次の想卵を抱いてしまつてゐるせゐでせうか。どうぞ、おゆるしをねがひます。

昭和三十三年五月一日　　英　治

目次

はしがき
新・平家今昔紀行
伊勢から熊野路の巻
湯ノ峰から那智の巻
淀川から神戸界隈の巻
四國白峯の巻
屋島寺から壇ノ浦の巻
瀬戸内と別府の巻
門司・小倉あるきの巻
宮島の巻
伊豆の巻

112 94 84 72 57 44 31 16 2

鬼怒川から山王越えの巻 131
會津磐梯山の巻 141
新潟〃白浪抄〃 156
名古屋から車窓の近江路 162
京の雷と有馬の河鹿 172
木の無い生田ノ森 180
會下山展望 185
鵯越えに立ちて 194
須磨寺寢詣での記 198

筆間茶話

新平家落穗集

清盛といふ人間 203
古い鏡と今日の顔 350
出家の話 354
358

机のちり　363
折々ぐさ　367
客窓雜記　373
草の實抄　378
晴稿雨筆　384
歳寒雜記　388
牛歩漫筆　391
或る一日半夜記　395
窓邊雜草　399
新・平家物語を中心に（對談）　403

新·平家今昔紀行

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

伊勢から熊野路の巻

中山競馬場の會員席でのこと。隣りのボックスにゐた舟橋聖一氏が望遠鏡を手にふと云つた。

「新・平家物語、まだつゞくの」「つづく」「あゝいつた史料、どう」「どうつて」「何から索くの」「保元や平治は、まとまつたのもあるけれど、ま、公卿日記だね」「公卿日記」「忠實の玉葉とか、左記、右記、百錬抄、山槐記といつたやうなもの。それと平安朝隨筆の著聞集、今昔、愚管抄なんか。あるね、あることは。けれど日記がいちばんさ。大事な日の天候まで分つてゐるし」

——そんな遠くの過去を話しながら、ぼく達はレンズを通して馬場の二千メートル標識のスタートに就きかけてゐる紅、白、紫、黄とりぐ〳〵な騎手の影に眼をこらしてゐた。そしてぼくらは一瞬のギャンブルに賭けた馬券をみなポケットに入れて固唾をのんでゐる。

しかし、このレース時間一分何秒ノ一の一瞬間にさへ、過去、現在、未來がある。喜憂こもぐ〳〵が一埃りのうちに舞ひ去り舞ひ來り、現實の夢はみな枯葉片々たる紙クズになつて飛んでゆく。——これをそのまゝ七、八百年前の過去へと、想像のヒルムを逆回轉させると、平安朝頃にも盛んだつた加

茂競馬や神泉苑の競べ馬を、今に觀ることはむづかしくはない。

人間は人間、馬は馬、太陽は太陽。今昔同一である。騎手や觀衆の服裝だのルールが違ふだけのことだ。

白河法皇や鳥羽帝や女院などが居さうな席に、進駐軍の將校やカールやルージュの女性群がきやあきやあいつてゐるだけの相違でしかない。「新・平家物語」について、舟橋氏から訊かれたやうな質問をほかの人からもまゝうけるが、大體ぼくの歷史觀はそんな所が基準で、史料や典據は蒐集の可能な限界でやつてゐる。もつともその方の涉獵には、週刊朝日編集部であらゆる助手的便宜をはかつてくれてもゐるし、その上いつか出版局長の嘉治隆一氏から「いちど時間を作つて、平家史蹟を一巡してみませんか」ともすゝめられた。これはありがたい。平家史蹟は、各地に無數だが、それらの現地に立てば、建築、美術、口碑、文書、一くれの土、もの云はぬ山河までが、昔を今に語りかけ、今を昔に考へさせてくれる。競馬場幻想などにまさること百倍である。宮本武藏執筆の頃から後は、史蹟順禮といつたやうな旅らしい旅は一度もしてゐない。今ごろ西へ行けば河豚も食へるし——と〝樂しみある所に徹夜あり〟を机に克服して、やつと十二月中旬、腰をあげたわけである。

スケジュール萬端、嘉治さんまかせ。ほかに同行は編集のK氏、O氏。東京驛を發、その日の午後に、名古屋の朝日新聞名古屋支社で挿畫の杉本健吉畫伯が「ふわァつ、は、は、は」と特徵のある笑

ひ聲と共に參加する。支社の人々、新東海のT氏や海潮音氏なども集まつて、例のごとく名古屋文化是々非々談、二時間ばかり。この名古屋には今、平家琵琶の古曲を語る日本でたゞ二人のうちの一人といふ撿校がゐると聞いて慕はしかつたが、名物の酒まんぢゆうを二つ喰べ、まもなく近畿電に乘り、松坂へ行く。

途中、中川驛まで同車して、大阪行に乘り換へた海潮音氏は、降りる間際まで「せうべん、忘れては、あきまへんぞ、せうべんを」と云ひつゝ降りた。そばの健吉畫伯にも誰にもこの意味は分りつこない。ぼくの舊句に、

せうべんの先を曲げるよ春の風

といふのがある、これを旅先から色紙にでも書いて送つてよこせといふ御註文なのだ。まことにこの一行と前途の旅情にはそんな風趣が豫想されよう。ひきうけて別れたが、その後、つい旅先からも送らず、歸京した今日までも、まだ約束を果してゐない。「あいつ、ほんまに、せうべんをしよつた」と名古屋の海潮音氏が、紙面の海潮音の欄で毒筆をふるはないうち、先にこつちで書いておく。

第一夜。松坂泊り。

三井八郎右衞門の松坂木綿の發祥の地。宿の戸田屋は、その舊本家のあとゝ聞くが、いとも簡素な

もの。この佗びた庭垣や質素な風呂場が、近世日本資本主義に咲き榮えた一財團の故郷かとおもふと、なかなか感慨がわいてくる。三井は亡んでも資本主義なほ亡びず、階級戰の旗も四方にへんぽんたり。そして、こゝの松落葉や山茶花のこぼれてゐる霜の庭を、朝起きてガラス障子越しに炬燵から見てゐると、あはれこゝにも「今樣平家」の無常がある。

着ふくれたどてらの背をみなまるくして、合宿連中、寒雀みたいに一つ炬燵へ起き揃ふ。健吉畫伯ひとり、室生寺へスケッチに行くため、早朝にもう出かけたとある。こゝの支局長から、伊勢と平家史蹟の關係など訊かれる。特に、行つて見るほどな史蹟は伊勢に求められないが、清盛の父忠盛は、伊勢の國產品村の出生といはれてゐるし、祖父正盛も、その先の維衡も、代々、伊勢守であつた。いはゆる〃伊勢平氏〃なる發祥がそれである。

保元や平治の亂に、都へかけつけた伊藤武者景綱だの伊藤五忠清などといふのは、みな伊勢の古市の人々で、いまの宇治山田市の附近は、當時、平家色の濃かつた地方と見てまちがひはない。その伊藤五忠清は、後、富士川の合戰で、源氏の軍に大敗してゐるが、前の三井本家と共に、江戸から近世へかけて、伊勢商人ののれんを全國的に賣つた伊藤松坂屋などの祖も、よくは知らないが、古市の平家武者の末かと思はれる。

鈴鹿山、關附近の山地から、伊賀へかけても、平家の一族は、多かつたらしい。平家重代の刀、拔丸烏丸の名刀は、忠盛が、鈴鹿の山賊を討つて、賊から獲たものだと傳說じみてゐるが、史書にも載

つてゐる。また、忠盛が一日、河藝郡の別保（いまの上野）の浦へ遊び、漁師たちが、人魚を網に上げたものを見たといふ話が〝古今著聞集〟にみえる。

そのほか、小松重盛の子資盛が、都の内で、攝政基房の供人と「車あらそひ」の大喧嘩をして、都から勘當され、暫く、謹慎を命ぜられてゐた田舍も伊勢であつたし、關の近くの三日ノ城址も、平家一族がゐた所で、伊勢と平氏の關係は、優に一課題になるほどである。けれど、ぼくらの旅行豫定では、こゝはほんの振出しにすぎない。炬燵の上で、Oさんからスケジュールの説明をきくと、南伊勢をぐつと一巡、紀州へ出て、史蹟行脚のやまは熊野三山から那智にあるらしい。そして京阪間を馳け巡り、屋島、壇ノ浦、別府、下ノ關、嚴島とあるき、終りは、音戸の瀨戸の清盛塚といふ長旅行であるさうな。

ひとの事みたいに云ふやうだが、實際、ぼくは鳥羽から先の半島は初旅だし、スケジュールは嘉治さんが組んだもので、こつちは、あなた任せのかつかうなのだ。唯、それにしては、平家史蹟巡りの第一日が、平家發祥の地としてあるなど、嘉治さんに云はせれば偶然でないかもしれないが、偶然みたいで、何となくうれしい。

ぞろ〳〵、歩いて、宿を出かける。

町中にある鈴の舍大人（本居宣長）の遺蹟をのぞき、城址へのぼつて、宣長文庫を見て降りる。冬

の旅は、寒い〳〵。腹もすき頃、和田金のこんろを圍む。こゝの松坂牛については辰野隆氏が何かに書いてゐたと思ふ。美味を追求する人間の貪慾にこたへて遠來のわれら凡夫を堪能させてくれるこの家のおばあさんの食牛育成における佛心卽商魂は、なるほど辰野さんの隨筆になりさうだ。鎌倉の久米先生、今先生、小島先生などみな來つて文字どほり酒池肉林の煩惱を醫せられた由を、牛鍋に靑葱を入れながらこゝの仲居さんたちがお噂する。たゞし鎌倉の惡源太や老武者たちも、この平家發祥の地においては、やはり餘りに荒びにけん、印象はよくなかつたやうに伺ふ。

數時間後は、むかしの參宮街道を、車で走つてゐる。黃塵ばく〳〵の中に、豐原、齋宮などといふ町の家並が過ぎてゆく。伊勢らしい在所風景、どの家も、商家らしいのに、戸は晝もおろして、しんと眠つてゐるやうな田舍町ばかり。名古屋、東京の音響や時潮を頭にゐがいて見て行く。かういふ旅をしてみると日本も廣いと思ふ。宮川の堤へ出る。堤に添つて、丸太足場みたいな物がえん〳〵と組んであり、それに何萬本とも知れない大根が干してあつた。伊勢平野の夕日に染んでそれは壯觀でさへある。〝大根干し〟の季題をおもひ出したが、句にならないまに、山田市をすぎて、外宮につく。

內宮へ詣つたときはもう暮色。參拜中に、とつぷり夜になる。禰宜、神職おふたり提灯をもつて案內して下さる。神宮の闇夜はちよつと世間にも山の中にもない澄みとほつたべつな暗さといふ感じである。提灯の灯が橙色にこんな美しく見えたこともない。その眼で杉のこずゑの星を見る。星はむらさき色だと云ふ子供の視覺は正しい。社家で薄茶をいたゞく。みんな喉が渴いてゐたやうな飲みッ振

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.